

369 悪性卵巣腫瘍に対する集学的治療の検討

近畿大学

池田正典, 山本嘉一郎, 高池哲治, 老木正彰
井上芳樹, 野田起一郎

【目的】現在, 悪性卵巣腫瘍に対しては集学的治療が必須と考えられている。そこで今回, 悪性卵巣腫瘍症例の治療成績の分析から集学的治療における問題点につき検討した。【方法】当科で治療を受けた原発性悪性卵巣腫瘍 104 例について, その手術術式, 化学療法と予後との関係について詳細な検討を行った。【成績】① Iai 期 10 例においては術式の如何によらず再発死亡した例は認めなかったが, I 期 29 例中 Ib 期 1 例, Ic 期 3 例の計 4 例は術後 8 ヶ月から 2 年 6 ヶ月の間に再発死亡した。②大網に転移を認めない I, II 期 48 例においては大網切除を行った 12 例と行わなかった 36 例との間に予後の差を認めなかった。③大網に転移を認めた III, IV 期 36 例においても大網切除を行った 23 例と行わなかった 13 例の予後に差はなかった。④化学療法についてみると, Cisplatin 投与を受けた 65 例中評価可能病変を有した 30 例における奏効率は 43.3 %であった。⑤ Cisplatin 投与を受けた 65 例の 5 年生存率は 56.2 %で, 一方, 他剤による化学療法を受けた 39 例の 5 年生存率は 37.3 %であり, 両群間には有意差を認めた。進行期別の予後の検討より, Cisplatin 投与例の予後の改善は III, IV 期例における予後の改善によると考えられた。⑥腫瘍の完全摘除が困難と思われる III, IV 期症例に対する手術術式については aggressive operation を行った 42 例と保存的手術を行った 12 例との間に予後の差を認めなかった。【結論】① Iai 期においては症例によって保存的手術が試みられてよい。②予後の改善という面からは大網切除の意義は認めなかった。③ III, IV 期症例においては aggressive operation にこだわらず, 保存的手術, 化学療法後の second look operation が合理的と考えられた。

370 卵巣悪性腫瘍患者治療後 follow-up における腹腔鏡検査の応用

東海大

篠塚孝男, 松山毅彦, 宮川和子, 村上 優,
黒島義男, 藤井明和

【目的】卵巣悪性腫瘍患者の治療後 follow-up における 2nd-look, 3rd-look operation の有効性は証明されたが, それ以上の開腹術は臨床上困難である。これに変わる方法として我々は, 患者に対する手術侵襲が少なく, 頻回に行える検査法として軸の細い針状腹腔鏡を用いた卵巣悪性腫瘍患者の follow-up を行い, 治療効果の判定, 再発の有無, 維持化学療法中止時期の決定などにつき検討した。【方法】CT や超音波, 腫瘍マーカー検査では異常所見のほとんど見られない卵巣悪性腫瘍患者 40 名に対し, 半年から 1 年の定期的間隔をもって合計 89 回の腹腔鏡検査を行った。そのうちわけは 2nd-look 32 回, 3rd-look 28 回, 4th-look 19 回, 5th-look 7 回, 6th-look 3 回で, その検査内容は腹腔内より肝, 横隔膜表面まで含めた肉眼的観察, 腹水や腹腔内洗浄液での細胞診, 異常所見部位からの組織診で, この 3 者で腹腔鏡検査の診断を行った。【成績】89 回の腹腔鏡検査で 67 回が陰性, 6 回が疑陽性, 16 回が陽性と判定され, 67 回の陰性例では判定後 6 ヶ月以内に再発の確定したものは 1 例もなく, 6 回の疑陽性例では検査 2 ヶ月と 5 ヶ月後に再発の確定した 2 例がある。これら再発の確定した 18 症例につき腹腔鏡下肉眼診, 細胞診, 組織診の正診率をみると, それぞれ 14/18 (77.8%), 11/18 (61.1%), 12/18 (66.7 %)となった。【結論】腹腔鏡下肉眼診, 細胞診, 組織診を併用した卵巣悪性腫瘍患者治療後の定期的な follow-up は, 治療効果の判定, 再発の早期発見には有力な手段であり, さらに治療を目的とした 2nd-look operation を行う時期決定のためにも有効な手段である。